

パレット物語

シシウ生

其 一

この頃僕の主人は病氣で一ヶ月の餘もブラ／＼遊んで居る、只さへ怠け勝ちの主人のこととして、病氣にでも罹るとそれこそ僕なんか丸ツきし關^{カマ}い付けない。のべツ幕なしに外に御供をして、カン／＼天目に曝されるのも遣り切れないが、矢鱈に長い間、暗い狭苦しい箱の中に燻つてゐるのも辛いものさ。殊に今度の主人の病氣は一時仲々酷くて、僕も心配した位であつたので、その怠け方も御話しにならない。僕もあまり退屈なので、何かこの機會を利用して、饒舌ツて見るの光榮を有したくなつた。元より僕は學者でも文士でも論客でもないから、饒舌することには順序もなけりや統一もない。その積りで聞いてくれ給へ。實はこの頃主人の話を聞いてると、近頃の「ミツエ」に出る汀鷗先生の三脚物語は仲々振ツてゐる、先生の文才にも敬服した、敢て美術に興味を持つものと言はず、誰でも大に讀むべき文字だ。マア君讀んで見給へと云つては來る人毎に吹聴して居る。汀鷗先生の三脚君とは僕も聊か知り合ひでもあるので、その話を聞いて僕もツイ飛び出して見たくなつた譯さ、パレットの三脚眞似たなんて彌次ツちやいけません。僕はこれでも生れは生粹のロンドン子なんだけれども、生れ落ちて間もなく日本に來て歸化してしまつたので、本國の様子はさツぱり知らない。思へば不幸な話して、本國に居れば或は今頃サーゼントだとかマ

ックワーターだとか云ふ豪い人に知遇を得て居ないとも限らぬ。極東の美術國ほ未ダ／＼吾々を優遇して呉れない。けれども日本は自然の美に富んで居るから、これを見られる丈は幸福である。

日本に來て當分の間は東京の神田にある文房堂に落ち付いて居たが、あまり氣に入ツた家でもなし、又、たとへ一日でもブラ／＼遊んで過すのは、アングロ、サクソンの血を受けた僕の好まぬ處なので、何處か早く良い主人を得て働きたいものだと思ツて居た、すると或る日一人の若い客が來て、僕を欲しいと言ツて身體中、何度も開けたり閉めたり散々ヒネクリ廻しながら、店員に高いから今少し負けろ／＼と怒鳴ツてゐる。「ドウモ私の處は定價より一厘も引けませんので」と店員が頭を掻き／＼挨拶して居る、何だい、ケチな客だな、僕はそんなケチン坊の處に行くのは眞平だぜと思ひながら、一體どんな男だらうとよく見ると、荒いスコッチの古ひハンチングを仰のけに被ツて、田舎縞の手織の袷に紺飛白の青白く褪色した羽織を着た、ドス黒い顔の眞中に無闇に大きな不行儀な鼻がピラミッドの様にどかりと座つた、二十一二のヒョロ長い書生ッポである。なんて無細工な艶消したスタイルだらうと感心して居ると、突然「ソレジャ止さう」といきなり僕をテーブルの上に投り出してサツサと出て行つた。一時は僕は胸震盪を起したかと思つた位だつた。何だつて亂暴な奴があつたものだ、金がなくて買へないからッて人を叩き付ける法があるものかと思つて店員の顔を見る

と店員も大きに不機嫌な顔をして居た。どうせあんな焼芋腹で僕などを招聘することが出来るもんかい、アゝもつと氣の利いた主人が欲しいなアと思つて居ると二三日経つてその客が又ヒヨックリ入つて来て、硝子棚の中から僕を引つ張り出した、オヤ／＼又遣つて來たな、矢つ張り僕に未練があるんだ。そんならサッサと買へばいゝに意久地なしだナアと可笑くなつた。先生又店員にグズ／＼言つて居たが聽て袂から財布を出して「オイ、ソレジア此處に置くよ」と言つて、何處で工面して來たか札や銀貨をジャラ／＼と臺の上に掴み出した。アツと思つてゐ間に僕は古新聞に包まれてその客の懷に子デ込まれてしまつた。その客が誰あらう今の大切な僕の主人さ。

其二

僕が主人の處に來たのは丁度千九百六年——明治三十九年の春だつたから、今年でもう五年目になる、今でこそ主人は柄にもない髯——無細工ながらも——なんか生して、三大節にはフロックコートで出かけるが、僕の來た時なんか随分プーアな學生だつたね。その頃主人は牛込の原町、或る玩具屋の二階に、三つ年上の早稲田大學に行つてゐる兄と一處に下宿して居たがね、時々兄から焼芋屋への全權公使を命ぜられて閉口して居たこともあつた、アゝア、人と生れて弟となる勿れだ」なんてこぼしながら買に行つたこともあつた。それでも時とすると「今日は僕、喰いたくないから行ないや」などと恩命を辭することもあつた。そんな時には主人の兄は、眼鏡の下から眼をパチ／＼

させて睨め付けながら「現金な奴だナア、ヂヤア喰はさんから宜い」と云つてプン／＼憤つて自分で買ひに出かける、暫くすると懷を蛙のやうに膨らして歸つて來る、そして殊更に主人の前に古新聞を擴げて、甘さうな香の蒸氣がポッポと立ち昇つてゐる奴を其上に取り出して舌鼓を鳴らして喰ふ、サア此場合主人の態度が大に見物だと、机の上で息を殺して觀察して居ると面白い。主人はチットの間は業と知らぬ顔をして我不關焉と澄して居るが、聽て人並外れて高く突起した喉佛が上下にビクリと動く。次いで唾液が食道の中をグイ／＼と鳴る音が聞へる、暫くするとアゝと兩手で頭を抱へてゴロリと横になつた、其一方の手が電光石火と閃いてパクリと一つ……その早業は人をしてアツと思はせる、それと同時に霹靂一聲、コラッ！泥棒！と兄の聲！或る時は、兄さんもコツを覺へて主人が手を出すのを逸早く腕を捉へて、キュツと撚ち上げて謝罪させたこともあつた。マア初めからみんなに主人の舊惡ばかりさらげ出しても主人の估券に係るから芋話しは中止しやう。

その頃主人は今の水彩畫研究所が水彩畫講習所と云つて神田三崎町の日本大學の横町、汚い狭い裏通りの何とか幼稚園と云ふものゝ中に併置されてあつた時分に通つて居つた、通ふと云つても、その時の講習所は、大下先生がホンのアマチュウアを導く爲めに、ツマリいろ／＼な業務を有する素人で水彩畫に興味を有し、慰み旁それを日曜毎に研究して樂しみたいと云ふ様な人々の爲めに組織されたので、隨つて授業日は日曜日丈し

かない。極めて吞氣な目的の研究所であつた。けれども主人が其處に入學したのは決してそんな悠々閑日月有と云ふ様な理由ではなく或る一種の眞面目な野心を持つて通學して居つたのであつた。その時分の講習所は無論、規模も小さく、始まつた計りでもあり、少しも世間に存在を認められて居なかつた、而かも僅々一ケ年の後、その少々たる講習所が一躍今の小石川に在る水彩畫研究所となり、堂々たる建物は行人の足をとぐめ、隆々たる名聲は漸次天下の耳目を惹くに至つたのを想へば其發達の速かなるに驚くと共に又今昔の感に堪へないものがある。僕はこの次から少しくその時代からの記憶を述べて見やうと思ふ。

日本水彩畫會新會友

静岡縣掛川西町

山本直吉

鹿兒島市大黒町六

今村武兵衛

■『方寸』展覽會號記事には方寸言、展覽會評、すききらひ、浴後、出發前「オノト」來書等にて繪畫は公設展覽會出品畫、くるみの若木、カリカチュア等あり一部送料共十五錢五厘にして發行所は小石川區小日向臺町三丁目十八番地方寸社なり。

『日本美術』十二月號にはシヨールベンホルの建築論、日本本彫論、謠曲と圖案、鵬心君に答ふ、舊都の旅其他、畫苑にはコロタイフ七葉を挿む。一部送料共二十六錢發行所は本郷駒込富士前日本美術社なり。

寄書

展覽會の説

横濱 北野至樂

敢て達人を氣取りて斯く云ふにあらざれども、當今各地に頻々として展覽會の開催せらるゝを見聞するに及んで、余輩は日本各地の展覽會上に高舉するにはあらざれば事實の眞相を看取し難きも、世には不徳なる好事者あり、超然たるべき展覽會をして、自己を廣告するの看板となし、甚しきは入場料を以て一利せんとするの劣輩なしとせず、寔に斯會の爲め嘆惜するのみならず、又以て社會を害するものといふべし、是れ展覽會の説ある所以也。

一國政府の設備せし文部省展覽會に付きてはいざしらず、所謂地方の水彩畫展覽會にありては、其目的は奈邊に存するか、曰く水彩畫趣味普及の一言にして盡く、然らば展覽會を看板として、自作品を見せびらかすを以て目的となすが如きは、没分曉漢として余輩の與せざる所、沙汰の限り也。

善政は善教に若かず、善教は善風に若かず、善風の俗を化するや、其の然るを覺えずして然る也とかや、一般社會人をして吾等が崇美する彩畫を知らしめ、以て彼等を美風に化せしめんと欲せば、各地に於ける同好者諸君は、純美なる精神を抱き、彩畫に目なき者に對し、一點の野心あるだになく展覽會を開かば、自己の極力公衆の便を計りて親切たらん事を期せよ、斯くせば